

課題番号	7-2-4	分野名	特用林産	予算区分	国庫
研究課題名	自然活用型特用林産物の生産技術の開発2-4 (自然栽培きのこの多品目安定生産技術に関する研究)【ムラサキシメジ】				
担当者名	谷山 奈緒美・大橋 洋二	研究期間	平成19～22年度		

目的

ムラサキシメジの野外栽培は、これまで、伏せ込み時期を検討しながら「落ち葉マウンド法」による栽培試験を行ってきた。昨年度については、9月25日に伏せ込み、今年度の11月上旬から12月上旬にかけて収穫が得られた。今年度については、同一年内に子実体の収穫を得るため、6月に伏せ込みを行い、引き続き伏せ込み時期について検証した。

方法

培地は、剪定枝葉堆肥：フスマを10：3で配合し、フィルター付きPP袋に1.0kg充填した。供試菌株には宮城県の保有菌株「HS-1」を使用し、培養期間は60日間で「落ち葉マウンド法」による伏せ込みを6月15日に栗林下で行った。併せて、円筒状の囲いとプランターを使用した栽培を行った。円筒状の囲いは、直径1.2mの円筒内に直径50cm厚さ3cm程度に堆肥を敷き詰め、その上に菌床を4個配置し、落ち葉を敷き詰めた(図-1)。プランターには菌床を6個配置し、腐葉土で埋め込み落ち葉を敷き並べた。どちらも広葉樹林下にそれぞれ4区画設置した。



図-1 伏せ込み状況(円筒囲い)

結果概要

1 平成21年度試験結果

マウンド毎の収穫量を図-2に示す。菌床数は、マウンド1～4が4個、5～8が2個である。マウンド4の数値を除き、広葉樹林下では菌床数が2個のマウンド、ヒノキ林下では菌床数が4個のマウンドの収量が安定するという反対の結果となった。また、広葉樹林下の総収穫量が100本で978gだったのに対し、ヒノキ林下では97本で1,288gと大型の子実体を収穫することができた。この試験では林内の照度は検討していないが、その差が収量に影響を与えた可能性が高いと判断される。

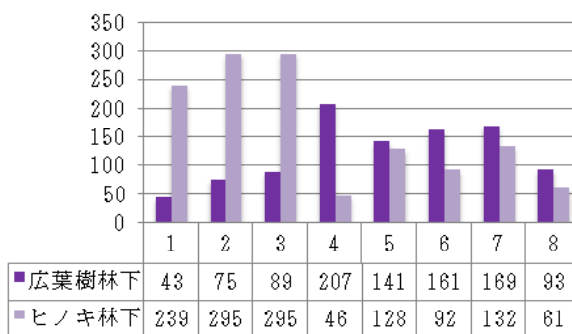


図-2 マウンド毎の収穫量

2 平成22年度試験結果

円筒囲いの試験区のみ同一年の11月中旬から下旬にかけて収穫が得られた(図-3)。収穫量は、1番多い試験区でも85gと非常に少なく、昨年度の試験区で1番多い収量の30%程度であった。シロの定着部分が少なかったことが収量に影響を与えたと考えられる。また、これまでに栗林で3回栽培試験を行っているが、1回しか収穫が得られず、当栗林と同様に照度が高い等の環境は栽培地として不適であると考えられる。



図-3 発生状況(円筒囲い)